The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近代日本における〈子ども〉のイメージ―大正期「童話・童謡」運動と「童心」の理念
Author(s)	河原, 和枝
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43177
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【4】

氏　　名	河原和枝（かわはらかずえ）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　16591　号
学位授与年月日	平成13年12月6日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**近代日本における〈子ども〉のイメージ －大正期「童話・童謡」運動と「童心」の理念**
論文審査委員	（主査） 教　授　伊藤　公雄 （副査） 教　授　山口　節郎　　教　授　厚東　洋輔

論文内容の要旨

本論文は、日本の近代化という社会的コンテクストのなかで〈子どものイメージ〉がいかに形成され、どのような役割を担ったかを、知識社会学的な観点から考察するものである。

A・シュッツやP・L・バーガーに倣って、「知識」を「人びとが知っていること」あるいは「知っていると思っていること」と広く定義するなら、人びとが子どもについて抱いているイメージも知識のひとつのかたちである、ということができる。ある〈子どものイメージ〉が形成され、一般に普及すると、それは子どもに関する「解釈図式」として「知の社会的在庫」(social stock of knowledge) の一部となり、子どもをめぐる社会的現実を構成する重要な要素となる。

わが国の近代的子ども観について考察する場合、西欧の子ども観からの影響以外に、明治五年の学制の頒布と、明治末期から大正中期にかけての近代的児童文学の誕生という二つの要因を考慮する必要がある。前者は明治政府の富国強兵政策の一環として実施されたが、これによって、義務教育の対象としての〈子ども〉がいわば「上から」制度的に創り出されることになった。一方、後者は、社会・文化的な意味での〈子ども〉についての「知」の変容の問題としてとらえることができる。明治期に創出され「お伽噺」と呼ばれた児童文学は、大正期半ばに、新しく「童話」と呼び変えられ、それまで児童文学とは無縁であった第一線の文壇作家たちの参加によって、質的にも著しく高められた。また官製の「唱歌」が批判され、詩人の手になる「童謡」が誕生した。この大正期「童話・童謡」運動は、たんに子どもの世界に関わるだけでなく、当時の思想界全体に関わる出来事であり、子どもに関する新しい「知」の創出に重要な役割を果たした。

以上のような観点に立って、本論文は次の六つの章から構成される。

まず、序章「〈子ども〉の社会的構成」では、〈子ども〉が社会的・歴史的に「構成」された存在であることを象徴的相互作用論の知見や社会史的研究などに基づいて確認したうえで、日本における〈子ども〉の誕生を、学制による「児童」の創出と、文学に先導された児童観の変化（つまり、子どもに関する認知と解釈の図式の変化）という二つの面からとらえる。

第一章「『お伽噺』の世界」では、明治の児童文学である「お伽噺」が誕生した経緯とその発展を、巌谷小波の業績を中心に概観し、「お伽噺」が示す子ども観を明らかにする。日本で最初に子どものために創作された児童文学は、巌谷小波の『こがね丸』（明治二十四年）である。これは、こがね丸という名の犬の仇討ち物語で、広く読まれ好評

を博し、以後の「お伽噺」の発展を導くことになる作品であるが、大人の世俗の事情が描かれている点などにおいて、今日の児童文学とは明らかに性格を異にする。

第二章「『童話・童謡』運動と『赤い鳥』」では、「お伽噺」から「童話」への転換と、大正期の「童話・童謡」運動の隆盛について述べる。明治末期になると、小波流の「お伽噺」の系譜からではなく、むしろ大人の近代文学の流れのなかから、新しいロマン主義的な〈子ども〉のイメージが登場してくる。そして、そのような観点をもったロマン主義作家、鈴木三重吉によって、大正七年、雑誌『赤い鳥』が創刊される。この雑誌を中心に展開された「童話・童謡」運動から、芥川龍之介「蜘蛛の糸」、有島武郎「一房の葡萄」、小川未明「月夜と眼鏡」、豊島与志雄「天狗笑」、北原白秋「雨」「赤い鳥小鳥」「この道」、西条八十「かなりあ」「お山の大将」など、数々の優れた童話や童謡が誕生したほか、『金の船』や『童話』など、類似の童話雑誌も次々と創刊された。『赤い鳥』の主な読者層は、都市中間層の子弟や地方の教師たちであった。彼らの回想や『赤い鳥』の投書欄などにより、『赤い鳥』のメディアとしての性格についても考察する。

第三章「『赤い鳥』の子ども像」では、『赤い鳥』に描かれた子どものイメージの諸形態を、作品に即して示す。『赤い鳥』は大正七年に創刊され、昭和十一年まで続いたが、あいだの休刊（昭和四年～五年）を挟んで前期と後期に分けられる。このうち前期（大正七年七月創刊号～昭和四年三月号）の一二七冊を資料とし、一応作家の創作と考えられる作品のなかから、まず子どもが主人公である童話を選び、それに『赤い鳥』の特徴を示す童話的な世界を持つものを加えると、二三八篇となる。そこに現れるさまざまな子どものイメージを「良い子」「弱い子」「純粋な子」という三つの基本的イメージ（およびそれらの複合形）によってとらえ、『赤い鳥』の子ども像の特徴（たとえば「弱い子」への強い関心など）を明らかにするとともに、それらを当時の社会的・文化的背景と関連づけながら分析する。

『赤い鳥』の子どもたちの善良さ、弱さ、純粋さといった属性に通底するもの、それらの共通基盤となっているものは、もともと西洋から移入されたロマン主義的な「無垢」の観念であるが、大正期の「童話・童謡」運動のなかでそれは日本風にアレンジされ、好んで「童心」という言葉で表現されるようになった。第四章「『童話』と『童謡』」では、大正期の「時代思潮」のひとつともなった「童心」観念の形成について述べたうえで、「童心」の二つの主要な表現形式であった「童話」と「童謡」の違い、とくに両者がその社会的広がりと働きにおいてかなり異なる側面をもっていたことについて考察する。ひとくちに「童話・童謡」運動というが、曲がつけられて愛唱された童謡は、その大衆性において童話を凌ぎ、一種の流行歌として広く人びとの感情に訴えることによって、国民的な「想像の共同体」を下支えする「感情の共同体」の形成に大きな役割を果たした。

第五章「『童心』のディスクール」では、「童話・童謡」運動を通して展開された「童心」言説に焦点を当て、「童心」礼賛に見られるジェンダー・バイアスについて考察するとともに、主として相馬御風によって形成された「良寛伝説」が「童心」観念の普及に果たした役割についても述べる。そして最後に、「童心」の観念がもったイデオロギー的な意味について考察する。大正期に入ると、明治以来の近代化・産業化のいっそうの進展と市民レベルへの浸透によって、一方では個人への関心が深まり、欧米の思想や知識を吸収した市民主義的な思想主義が発展したが、他方では、資本主義の急速な進展に伴い、功利主義や私生活享受主義への傾斜も強まっていった。童話・童謡運動を通して人びとが見出し称揚するに至った「童心」（＝無垢）の価値は、近代化・産業化の推進に不可欠な合理主義や功利主義、業績主義とはいわば対極に位置するものであり、近代社会の「優性価値」に対する「副次価値」（subvalue）としての機能をもった。副次価値としては、それは、基本的には優性価値を補完する機能を果たしたが、ときには「対抗価値」としての意味を担い、優性価値への疑問や批判を提示する働きをもつこともあった。

以上のように、本論文は、広い意味での知識社会学的視点から、近代日本における〈子どもイメージ〉の形成に大きな役割を果たした「童話・童謡」運動に焦点を合わせ、この運動の中心をなした雑誌『赤い鳥』に発表された童話・童謡作品を主たる資料とし、それらを当時の社会・文化的コンテクストに関連づけて分析することを通して、「童心」の理念を中核とする新しい「知」の誕生と普及の過程を明らかにし、またそれが一種の「副次価値」として担ってきた社会的機能とそのイデオロギー的意味を究明したものである。こうした〈子ども〉についての「知」は、現代の子どもをめぐる諸問題ばかりでなく、それを越えて、さまざまな政治的・社会的文脈で今日なお重要なイデオロギー的機能を果たしていることを考慮するなら、本論文の分析は、「童心」のレトリックの現代における働きを解明してい

くうえでも有効性をもつであろう。

論文審査の結果の要旨

本論文は、近代日本の子どものイメージをめぐって、特に、大正期の童話・童謡運動を軸に考察を加えたものである。

よく知られているように、子どもイメージの形成については、すでにフィリップ・アリエスをはじめとして社会史的あるいは歴史社会学的研究などの先行研究がいくつか存在する。本論文は、これらの先行研究をふまえた上で、日本の近代社会形成期における子どものイメージ形成の問題を、児童文学を軸に論証している。

巌谷小波に代表される御伽噺などを中心に、明治期における日本の児童文学の成立についての考察をしたうえで、本論文は、主に、大正期の児童文学運動、なかでも『赤い鳥』に代表される「童話」「童謡」を分析の俎上にあげる。特に、そこで描き出された子どもイメージについて、複数の軸を立てた上で、詳細な分析が加えられ、その分析のなかから、大正期の「童話・童謡」のなかに、西欧から輸入された「無垢」の観念の日本風アレンジとしての「童心」という理念の成立が明らかにされる。

豊富な資料収集に基づき、これまで十分に光があてられて来なかった近代日本の「童心主義」について、知識社会学・文化社会学の観点から緻密な考察を加えた本論文は、近代日本社会の文化現象の研究という点で新たな知見を加えるものであり、博士（人間科学）の学位を授与するに十分なものであると判定した。